

ドイツの土壁事情

にしざわ ひでかず
西澤 英和

京都大学工学部建築学科講師

1 はじめに

2001年9月13日から15日の3日間、ドイツの南部、ヘッセン州の歴史都市ビースバーデン近郊のビプリッヒ城で「歴史的な木造建築の修理と構造補強」に関する国際会議が開かれた。ヘッセン州の歴史保存局とユネスコの世界遺産会議(イコモス)の共催であったが、日本の伝統木造建築とその維持保存技術についても白熱した討論が交わされ、欧米での日本建築への見識の高さに改めて驚かされた。

会議の前後、州保存局の計らいで数多くの文化財修理現場などを視察する機会を得たが、そのなかで日本の伝統左官技術もうまく取り入れながら、土壁の技術を現代に復活させるのに成功している事例に接することができたので、現地写真を交えて紹介したい。

2 ドイツの土壁

ドイツには写真1に示すような伝統的な木造の民家がたくさん残っている。ハーフティンバーの木造建築には写真2に示すような土塗り壁がよく用いられているようだ。下地の考え方は我が国の真壁と似たところがあるが、藁ナワなどで下地を結束するのではなく、法隆寺など古代建築と同様

に貫の両端を三角形に欠き込んで横材のエツリに払い込んでいる。このような手法は「本四つ」にも見られる。ただ、日本では横貫にするところが、タツに組むところがおもしろい。小舞は竹ではなく、「木小舞」。しなりやすい「柳」のような樹木の枝を半割にして編み込むらしい。その他、地方色豊かな土壁の技法が数多くあったそうだが、現代工法におされて70年代にはほぼ完全に技術が途



写真1 ドイツのハーフティンバーの民家

絶えたそうだ。これはフランスなど他の欧州諸国でも同様だったらしい。

しかしながら、70年代後半になると新建材など現代工法の弊害が顕在化しはじめた。再利用が難しく、健康を害し、さらに環境汚染をまねく化学素材を含む建築資材はもはや建築には使うべきではないという共通認識が徐々に広まり、土塗り壁のような手作業による伝統技術が見直されるようになったのである。

だが、一度廃れた伝統技術は容易には復興できない。土壁職人のギルドも崩壊していたからである。そんな土壁の復興運動に大きな力を与えたのが、早稲田大学で長年日本文化について研究されたアーヘン工科大学のシュパイデル先生、それにドイツの漆喰技術などを学ぶ傍ら、日本の伝統左官技術を紹介するために毎夏アーヘンなどを訪れていた左官の久住さんだ。やがてここアーヘンの地で日本の伝統左官の実地講習を受け、講義を聞いた人たちのなかから、ドイツの土壁の復興を志す人たちが育っていったのである。



写真2 ドイツの古民家の土壁

いきさつはおもしろい。シュパイデル先生は専門の「日本学」を教えるべく実習敷地を提供してもらったところ、たまたま粘りのあるよい土があるので、日本の土壁の実習を思い立ったとのこと。そこに久住さんが加わり日本の左官技術の実際を伝授されたのである。写真3を御覧いただきたい。これはアーヘン工科大学の建築学科の実習作品である。学生達はまだ訪れたことのない日本の伝統壁—さび壁、磨き大津、本聚楽、などを巧みに試みている。驚くべきことである。

3 CRAYTEC 社の成功

アーヘン近郊のViersenという町にその会社はあった(写真4)。創業者はulrich Roelenさん。シュパイデル先生や久住さんの演習に参加した聴講生の一人である。氏は1983年に左官職人となって現場経験を8年ほど積んだ後、1991年に土壁の建材を製造するCRAYTEC社を設立。現場経験を活かして、今度は使いやすい土壁の素材や

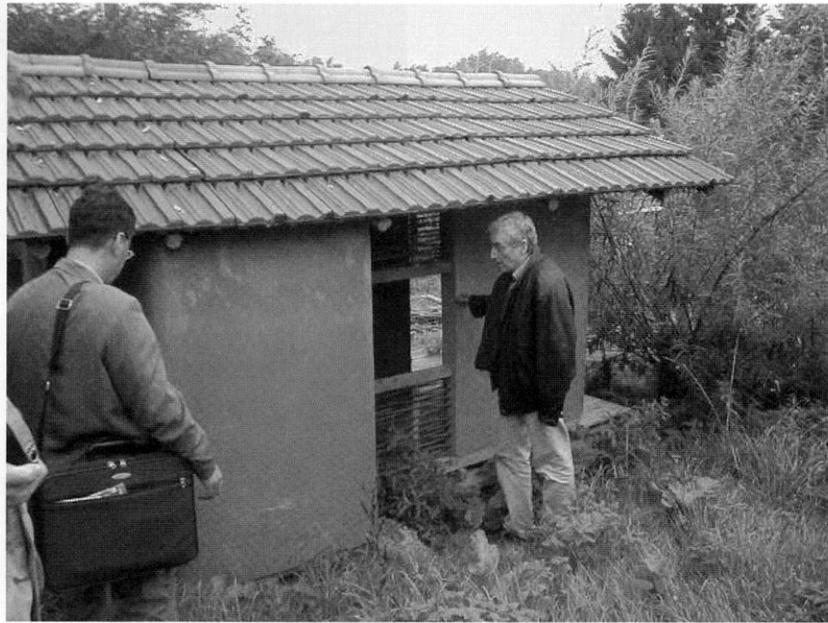


写真3 アーヘン工科大学の実習作品 シュパイデル先生とともに



写真4 CRAYTEC社



写真5 彫刻家のアトリエ

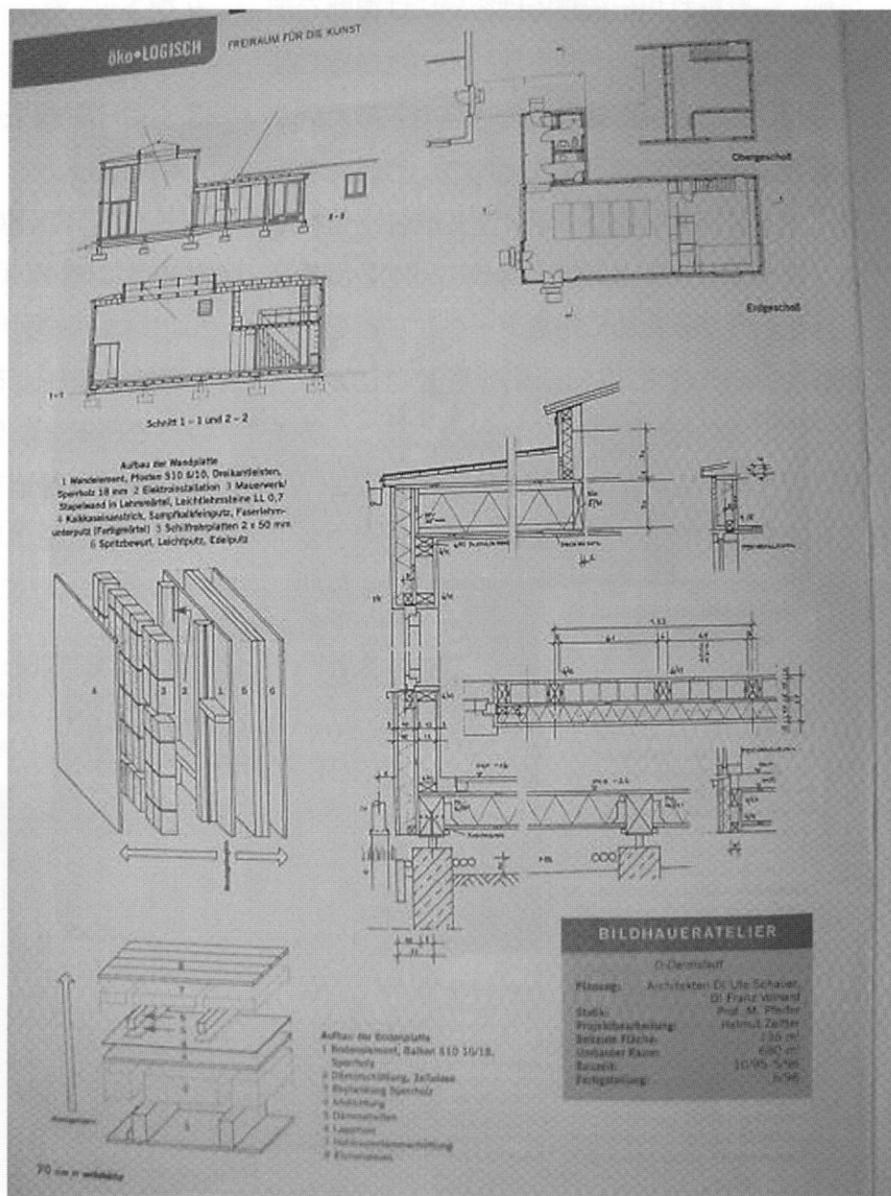


写真6 土壁の下地の構造

土を活かした自然素材の建材を職人に提供する事業をおこしたのである。

緑豊かな田園風景のなかの赤レンガ造りの社屋は、かつて1908年から38年までレンガを製造していたホフマン輪炉を再活用したもの。考えてみればレンガ工場は土などの建材を扱うにはもってこい。広い土置き場や土練り場、それに重量資材の輸送の利便性などレンガ工場と左官建材工場とは共通点が多い。この工場は1988年に文化財に登録されたが、市は放置された工場施設の有効利用の意義を認め、有利な条件で借りることができたと言う。土壁の材料は主に数十キロ圏の建設残土。無償で提供された様々な残土を土壁に合うようブレンドしているのだ。詳細は省くがドイツでは土造りに日本のような「水和せ」はしない。また、藁スサのかわりに麦わらを裁断して混入する。これは農業副産物。壁の下地はハンガリーやルーマニア産の葦。チップは製材工場から、麻はバングラデシュなど。いずも自然素材で土に還るのだ。

訪れた時はまだ大量生産とまではいかないが、大形トレーラが次々と土壁製品を出荷中で、着実に土壁の需要は伸びていると言う。関係者の表情の明るさが印象的だった。

4 新しい土壁の造形を目指して

写真5はダルムシュタット郊外に最近作られた彫刻家のアトリ工。設計者はVorhaldさん。外観は日本の神社の朱塗りを思わせる鮮やかな赤。縁の芝生に端正なシルエットが一層際立つ。内部は白漆喰仕上げ。一見コンクリートかと思われるが、実は木造土壁、どちらかといえば土蔵造りに近い構造。見にくいくらいも知れないが、構造のイラ

ストを写真6に示す。断熱のためこの建物の天井、床、壁は分厚い土壁でできている。木造フレームの間に塗壁の代わりに一種の日干しレンガブロックを充填し、その表面を土塗りして、漆喰で仕上げたもの。こうすることで、土の厚い壁の乾燥期間は大幅に短縮される。この工法は日本の「ネコ積み」とそっくりである。これらは全てCRAYTEC社の建材を用いたと言う。

ドイツで親方(マイスター)達と接して強く感じたのは、彼等の徹底した「現場主義」と仕事に対する旺盛な「創意工夫の精神」、それに伝統の技に学ぼうとする「真摯な姿勢」であった。このような「クラフトマンシップ」が今日のドイツの土壁の復興の原動力となっていること、そして洋の東西を問わず「職人気質」こそが建築文化を支えていることを改めて実感した。